

1-4

身体拘束廃止に向けての取り組み

見た目に惑わされるな！！

心への働きかけ

個別ケア

特別養護老人ホーム 上井草園

発表者：介護副主任 関口 恵	共同研究者：上井草園職員
所在地：東京都杉並区上井草3-33-10	
TEL：03-3394-1094	E-mail：kamiigusa@3friends.or.jp
FAX：03-3394-9834	URL：http://www.3friends.or.jp

今回の発表の施設 またはサービスの 概要	社会福祉法人サンフレンズ上井草園は駅から徒歩3分で閑静な住宅街にある2階建て回廊型の施設です。1階の半分、2階部分が特別養護老人ホームで、3グループに別れています。中央部にはビオトープがあり、野菜の栽培なども行っています。入所定員75床、ショートステイ9床。同施設内にデイサービス、地域包括支援センター、居宅介護支援センターを併設。
----------------------------	--

〈取り組んだ課題〉

82歳女性。パーキンソン病、幻覚・妄想あり。
発語が難しく、意思疎通が会話では難しい。
H20年7月2日入院先より帰園。経管栄養（胃ろう）となる。病院でも日中は離床されピアノを弾くなどの活動をされていたとのことで、帰園後もできる限り離床する機会を設けていた。しかし、10月下旬頃より熱発など体調不良が続き、また同時期に精神疾患のある他利用者が窓の鍵を壊し外へ出たり、暴力行為をするなど個別対応が必要な状態であったため、1日中臥床していることが多くなってしまっていた。11月初旬、明け方、午前中にそれぞれ指の爪をはがしてしまう自傷行為発生。ガーゼ、包帯保護をしてもすぐに自身で外されてしまった。処置をし、包帯を止めたその次の瞬間には包帯を解かれるほど器用であり、素早かったため、一瞬も目を離せない状況であった。しかし、常時見守りをするのが不可能であったため、また感染症予防のため、ご家族確認後直ちに両手にミトンを着用した。
その後、氏の望みはどんなことなのか、職員が気持ちを少しでも理解できるよう、そしてミトン外しできるように取り組んだ。

〈具体的な取り組み〉

ミトンを外すまでの経緯
○看護師を中心に傷の回復具合を観察。
○離床時間を設け、離床時のみミトンを外す時間を作った。
○氏がどんなことをしたいのか表情、ジェスチャーで読み取れるよう職員が以前よりたくさん声かけをするようになった。
○ピアノを弾きたいという希望が多かったため離床時にはピアノを弾いて頂き、周囲の方々に歌を歌っていただくようにした。
○カンファレンス、体動調査を繰り返し実施。

- ・自傷行為当日 → ミトン着用の必要性について（カンファレンス）なぜ自傷行為が起きたのか？
- ・離床時にミトンを外した時の様子を観察（1週間）
- ・ミトンをして臥床している時の様子を観察（2週間）
- ・1か月後 → ミトンを外すかどうか？（カンファレンス）
- ・終日ミトンを外しての様子を観察（1週間）

〈活動の成果と評価〉

氏と多くコミュニケーションを取ることで、職員も氏の表情などから気持ちを多く汲み取れるようになった。
また、看護師との連携をしっかりと取れるようになった。（熱発の確認など）
以前は臥床時にベッド上で90度回転するなど多動な様子が見られたが、しっかりと離床時間を設けるようになり、落ち着いて臥床されるようになった。
園全体として、「経管栄養者＝離床時間が短い」という意識を改革することができ、他の経管栄養者も離床する機会を多く、そして長く持てるようになった。

〈今後の課題〉

職員の思い込みによるご利用者への対応の改善。
（例：経管者＝あまり離床してられない）
今回のように事故（自傷行為）が起きてからの対応ではなく、事故を未然に防ぎ、早めにご利用者のストレスなどを軽減する対応をできるようにする。

【メモ欄】